

「測り縄」

～誰が測っていますか？～

詩編 16 篇

■ ダビデのミクタム

詩編 16 篇は「ダビデのミクタム」という言葉で始まります。ミクタムは、「苦しめられている」「攻撃を受けている」「金の」「隠されている」など色々な解釈がなされています。そして詩編 16 篇の羊はキリストの十字架へと繋がっていきます。ここでダビデは測り縄の比喻を用いて神様が測った測りについて説明します。ダビデは非常に苦しい人生を生きた人でした。多くの兄弟の末っ子だったダビデは数の内に入れてもらえない、そんな存在でした。反対にゴリアテを倒し活躍を始めると、寵愛を受けていた王から嫉妬により命を狙われる…。王となることを約束されながら 10 年余りも荒野での逃亡生活を余儀なくされました。しかしダビデの中心にあったのはこの 6 節です。人の言葉に影響されず、任された羊飼いといる仕事にも忠実に大切に責任を果たしていたことが聖書から読み取ることが出来ます。この詩編 16 篇が書かれた時、ダビデはサウルに命を狙われ最悪の時でした。しかしダビデはそのような時にこの詩編を賛美し苦難の中に「隠されている金」を見出そうとしたのです。

■ 測り縄：詩編 16 篇

「測り綱」＝「ハヴァリーム」は、本来、土地の測量を行う者が、土地を区切るために用いたものです。「測り綱（縄）が落ちる」とは比喩的に用いられ、「自分の人生の持ち場、または自分の果たすべき責任範囲」というべきものが与えられたこと」を意味します。ダビデは人生最悪最大のピンチの時に「あなたこそ、私の主。私の幸いは、あなたのほかにありません。」(2 節)と告白しました。主によって「測り綱が落ちた」とすれば、それは素晴らしいものだと宣言しました。ダビデは自分で測る事をしません。ダビデがしていたのは「主と共に歩みます」という判断だけでした。与えられる全てを「幸いだ」と信仰によって受け取ったのです。ですからダビデは詩編の中で満足や幸いについて賛美しています。「苦しみであったことは私にとっては幸せでした」といつとも、幸いな状況でないときに幸いだと宣言しているのです。ダビデが選んでいたのは自分にとっても最もふさわしい持ち場が与えられたと確信すること。その状況の中で自分は神と共に歩むことを選んでいたのです。6 節の後半部分のヘブル語原文は、「実に、私のために(与えられた)嗣業は美しい(すばらしい)」という意味です。「実に」「嗣業」「美しい」「私のために」四つの言葉が並んでいます。国家権力に狙われ、かつては寵愛された王から憎まれ、まさに自分の存在意義も見いだせなくなるような事態を幸いとして受け取ったのです。「シャーフアル」は詩編 16 篇 6 節にしか出てこない動詞ですが、素晴らしい故に「快く受け入れる」と解する事ができます。

■ 「本来の量る」とは何か

自分の人生の「縄張り」が決められた」と信じて、快く受け入れ信じることで、その与えられた責任範囲に力と全神経を集中することが出来ます。しかし、自分の人生は自分で選ぶと思っている人はあれもこれもと手を伸ばしその結果力は拡散し、全てが中途半端な生き方になってしまいます。私達はそのような生き方になっていないでしょうか？神から与えられた「測り縄」は自分にとって良いものであり、輝かしいものであり、喜ばしいものであり、素晴らしいものだと確信できる者は、力から力へと進み、「幸い感」はより増し加えられます。たとえ行き詰まったとしても、それが新しい境地を開く契機ともなります。私達はそんな歩みをしていきたいと思えます。

■ マルコ 4:24-34 測る量りで測られる 聞いていることに注意

マルコ 4 章 24 節は「聞いていることによく注意なさい。」と始まります。まずあなたの耳に入る言葉に注意せよという事です。私達は納得したいので、耳に入ってくる言葉が自分にとって良いか悪いかを判断しています。聖書の言葉さえも自分にとって良いか悪いかを判断してしまいます。これは主人が神でなく自分になっています。本当に聞かなければいけないのは自分にとって聞きにくい言葉です。自分で測った時点で「ズレる」ます。神の測りの中心は愛です。愛が知恵を与えて下さいます。だからダビデはいつも神様に測りを委ねました。そのダビデの息子ソロモンは父の生き様を継承し知恵を求めていきました。

■ 「持っているものは・・・」

マルコの福音書の後半はいきなり「持っているものは・・・」という表現になります。同じ御言葉がマタイに出てきます。『だれでも持っている者は、与えられて豊かになり、持たない者は、持っているものまでも取り上げられるのです。』(マタイ 25:29)

主人は各々の能力に応じて、5・2・1 タラントを渡しました。5 タラント、2 タラント預かった者は忠実にタラントを増やしました。しかし、1 タラント任された者は土の中に埋めました。タラントを増やしたしもべは主人に同じように良くやったと言われました。しかし、1 タラント任されたしもべはこう言いました。『ご主人さま。あなたは、時かない所から刈り取り、散らさない所から集めるひどい方だとかかっていました。』このしもべは主人からこの話を聞いた時点で自己判断したのです。主人の言っていることを良いか悪いか判断したのです。しもべはその自己判断によって自分の生き方を決めました。「持たない」とはどういう事でしょうか？その人を信頼しようとする愛の関係を持っていないという事です。

■ マタイ 7:1-5 自分の測りで善悪を判断すると理不尽が起こる

私達はこの二つのタイプのどちらかに属します。「人に求めて自分はいない」タイプと「人に頼れず一人で行う。」というタイプです。どちらとも自分で判断しているので、人間関係に理不尽が起きます。この理不尽な関係によって、相手は信用しなくなります。そして2つとも最終的には同じ結果に陥ります。「自分は悪くない」と相手のせいにする人も「自分が悪い」と劣等感の故に自己卑下に陥る人も最終的には相手に矛先を向ける結果になります。これはアダムとイヴの原罪にまで遡ります。あなたはアダムでしょうかイヴでしょうか？自分見なくなったアダム。劣等感で自分を責めたイヴ。そのすべての負い目を背負ってイエス様は十字架に向かわれました。聖書はイエスの生き様、そして時代を超えてまで神の測り縄に生きようとした人生を物語りつつ伝えていきます。

■ ルカ 6:37-38 人々ではなく 神が与える

だから兄弟の目の塵を測ってはいけなし、自分の目の梁を見た時にうろたえてはいけません。量りを良くするのです。神が語る言葉を測らずに確信をもって受け入れると、その受け入れたあなたの測りによって、天地万物によってあなたを量る量りが整えられます。あなたが神様の測りの中で生きようとする測りを持つ決断をした時、神様はあなたを祝福することができます。測らずとも信じなさいと言っています。クリスチャンは相手に求めず、神様と共に量りを整えていく訓練をこの地で行っていくのです。あなたの目にはふさわしくない種も神が蒔けと言われた種は信じて蒔くという事です。人間が種を選んではいけません。そうすると、「押しつけ、揺すり入れ、あふれるまでにして、ふところに入れてくれるでしょう。」とあります。神の国とその義とを第一に求めると必要は与えられます。

■ おわりに

自分の人生が無価値に感じる時自分を裁かないで下さい。神様が与えたその測り縄であなたの働きをするように言われています。その測り縄から出てしまうと自分を見失います。人を測るようになり相手に暴挙を求めるようになります。自分が見えなくなるのは善悪を自分で判断するからです。私たちがすべきことは置かれた所で咲くことです。今それを選んでいるのでしょうか？ここは自分の咲く場所ではないというのでしょうか？ダビデはそんなとき、私の置かれた所は最高だと最善を尽くしました。言っている事としている事がくいちがっていないのでしょうか？今日それを取り去りたいのです。人には厳しく自分には甘い。自分はだめだと評価し自分を追い込む。この二つを今日捨てたいのです。ダビデのように神の前にでたいのです。主よ私の罪を赦してください私を清めてください。人の知識によらずあなたに従うことをさせて下さい。間違った判断をせず従う事ができますように、5 タラントを 10 タラントに 2 タラントを 4 タラントに増やすことができるよう祝福して下さい。

(要約者: 牧 唯恵)

(2020年2月23日)